ふるさとの民話　（第十話）

『松根油取りの話』

戦時中の話です。当時の役場か区長さんにいわれて、山へ松の根を掘りに行ったことが、三回ほどあります。各班ごとに、今日は一班、一週間後には二班といったように、計画を立てて、どの班ももれなく、松の根を掘りに行きました。

朝早くから、荷車を引いて山へ行きました。私は、どれが松の根っこかわからなかった。きそべさのお父っちゃん、忠助さん、よさぶのおじいさん、その他元気な男たちは、一生懸命に松の根を掘り起こした。私たち女は、それを山から荷車まで運ぶ役でした。一日もすれば、荷車いっぱいになりました。しかし、飯川だけでなしに、他の町の人たちも掘りに行くわけで、そんなに簡単に松の根があるわけでなく、さがすのに大へん苦労しました。

飯川の山、江曽山、五箇山（ごかやま）へも行きました。私たちは行かなかったが、他の班で、コロサの山まで行ったと話に聞いたことがあります。

掘り起こした松の根は、飯川の公民館の空き地に、山積みにしてありました。一回だけだが、油焚きにいったことがあります。今の八幡の駐在所のところに、各在所から集められた松の根が、山もりに積んであり、その向かいに小屋がありました。小屋の中には、大釜があって、大釜のまわり一面油でベタベタでした。

私は、都会から疎開（そかい）しておいでた前田さんと二人組で行きました。そして、一日中、火の番をしていました。男の人が二人いて、一人は、松の根っこを割って細かくし、もう一人は、大釜から油を取り出していました。私たちは、細かくなった松の根っこを大釜に入れ、時々入れかえ、一日中、焚いていました。真っ黒なコールタールのような油が、大釜から少しずつ出ていたのを覚えています。

（飯川町　　稲垣　きい）

→